日本文学部会

【概要】

生　田　慶　穂*

第10回国際日本学コンソーシアム日本文学部会は、12月15日午前９時半から午後１時まで、人間文化創成科学研究科・全学共用研究棟６階大会議室にて行われた。大学院生の研究発表４本に大学教員による講演２本を加え、３時間半にわたる充実した内容となった。登壇者と題目は次のとおりである。

⑴　朴英美（お茶の水女子大学院生）
「扇に書く和歌―『源氏物語』におけるその会話的機能をめぐって―」

⑵　謝蒨儀（国立台湾大学院生）
「『女誡扇綺譚』における台湾女性像」

⑶　アンナ・ヤルホフスカー（カレル大学院生）
「松本清張の『点と線』におけるナラティブとテーマ」

⑷　イゴル・チマ（カレル大学院生）
「現実のパラフレーズ―『さようなら、ギャングたち』の挿話的な構造―」

⑸　田中アトキンス緑（ロンドン大学SOAS）
「戦後文学の中の他者としての異文化と女性像―小島信夫作品を通じて―」

⑹　范淑文（国立台湾大学）
「異文化研究の視座による川端文学の一端―「夕映少女」を例として―」

発表の概要と質疑応答の様子を順に報告する。

朴英美氏は、扇に和歌を書き、それを人に贈るという一連の行為の意味を考察した。平安期の文献における用例を『源氏物語』を中心に取り上げ、扇の色や図柄、人物の関係性や状況などを具体的に検討し、扇に和歌を書いて贈ることには会話的機能があると指摘した。日本の扇は、単なる風を起こす道具ではなく、早くから芸術的な側面をもち、ひいては文芸上の表現手段として用いられたとのことである。会場からは、例えば黒い扇はどのような意味をもつのか、中国と韓国での扇の使用例は日本と違いがあるか、といった質問が寄せられた。前者に対しては『堤中納言物語』を例に挙げて説明し、後者については今後の課題とするとの回答であった。

謝蒨儀氏は、日本統治下の台湾を舞台にした佐藤春夫の小説『女誡扇綺譚』における台湾女性像を論じた。考察は、物語に描かれる二人の女性、沈女と下婢の人物設定を中心に展開した。まず、沈女が資本主義社会の恩恵を受けつつ、依然として家父長制の抑圧に晒されていたことが明らかにされた。次に、日本人との結婚を拒否して下婢が自殺することは、民族主義の文脈にとどまらず、近代女性の自覚として捉えられることが提起された。質疑応答では、下婢の自殺の位置づけをめぐって議論が行われた。途中で定刻を迎えてしまい誠に残念であったが、相手が日本人でなかったら下婢は自殺せず結婚したのだろうか、との会場からの問いかけは重要であった。

アンナ・ヤルホフスカー氏は、社会派推理小説の嚆矢とされる松本清張の『点と線』を題材として、探偵小説におけるテーマ（主題）とナラティブ（語り）の関係を分析した。手順として、物語

＊お茶の水女子大学大学院院生

の展開を５段階に分け、出来事を細分化し、テーマがいつ表出するかを調査しグラフに示した。その結果、本来探偵小説には不要ともいえるテーマを、松本清張が巧みにナラティブに織り込んでいることを明らかにした。最後に、ナラティブの要求に従っている限り、テーマは探偵小説というジャンルを破壊することはない、と結論づけた。日本の探偵小説と海外の探偵小説との相違について質問が出たが、ジャンル全体の分析は手始めの段階であり、今後の課題にするとの回答であった。

イゴル・チマ氏は、高橋源一郎の『さようなら、ギャングたち』における挿話的なナラティブの構造を検証した。作中に現れる無数の文学や歴史事件の引用は、現実のパラフレーズ、すなわち現実の世界とは異なったコンテクストを与えられて存在しており、読者はそのコンテクストを理解して初めて、作品の意味的構造を把握できるという。さらに、ステレオタイプ、誇張法、パラドックスといった多彩な手法が用いられていることを、テクストに即して指摘した。異文化に身をおく読者は現実のパラフレーズをどのように読むか、との質問に対しては、高橋源一郎が創出する現実のパラフレーズにはユニバーサリティがあり、文化的背景を問わないのではないか、と回答した。

田中アトキンス緑氏は、いわゆる第三の新人のひとりである小島信夫の作品に着目し、戦後文学における異文化と女性像について言及した。小島信夫の作品には、アメリカを他者として強く意識し、自らの帰属意識を問う登場人物たちが数多く描かれているとのことである。『燕京大学部隊』『星』の解説の後、特に次の２作品が詳しく取り上げられた。『アメリカン・スクール』では、英語を権力と捉えコンプレックスを抱き、あるいは同化を望む日本人男性の姿が描かれる。一方、流暢な英語を話す日本人女性は、英語を感覚的にエキサイティングなものと捉えており、物語中の男女の表象に明確な差異が認められるという。また『抱擁家族』では、日本人夫妻の妻と米兵の肉体関係が、他者アメリカと日本との同化を暗示し、女性がアメリカへの実在的な歩み寄りとして描かれている点が指摘された。質疑応答では、同時代の作家との関係、特に女性作家では大庭みな子とのつながりはどうみるか、との質問が出た。女性作家の目線は、男性作家である小島信夫の目線とはやはり異なると予想される、との回答であった。

范淑文氏は、異文化とは何か、との問いを出発点として、川端文学を異文化研究の視点から位置づけようと試みた。氏はまず、国・民族・宗教等の違いに基づく「外側から見る異文化」と、同一コミュニティー内における多様性・個性を前提とする「内側から見る異文化」という大きな枠組みを示した。次に、『夕映少女』に焦点を当て、少女の描写を綿密に分析した。結果として、第一に、『竹取物語』に通じる聖処女崇拝を読み取れること、第二に、春子・お栄ら大人の女性たちがだらしなく野性的に描かれるのに対して、少女は貴族的で毅然とした様子で描かれることを指摘した。最後に、処女性への憧憬は日本的であり、「外側から見る異文化」としての特徴といえるが、「内側から見る異文化」の視点からは、日本文壇における川端の個性と評価できる、と総括した。今回のコンソーシアムのテーマ「異文化研究と日本学」に、真正面から取り組む論であった。質疑応答では、『雪国』の解釈にも話が及び、川端文学全体を見渡した議論が交わされた。

今回の日本文学部会は、古典文学の発表が１本、近現代文学の発表と講演が併せて５本と、近現代文学に重点が置かれた。参加校は国立台湾大学、カレル大学、ロンドン大学SOASに本校を加えた４校であった。貴重な研究交流の機会を得、たいへん意義深い半日であった。講演者、発表者諸氏、会場に足を運んで下さった皆様に、心より御礼申し上げる。